特42
848

夫れ天ハ正道を加護ス故に至誠の人ハ艱難に陥入共自然と天道の恵憐と戴く。誠に正実の道ハ尽さゞんべからんべし既に孝子岩造ハ人違ひあて虜捕とされ又ハ賊の為に衣金と奪えられ須ケの浦辺に死すべくなりしも或ハ藝州にて島津氏の恵まれ道行人の仁もありて今まで不圖勝氏に拜謁仕る事皆天道の然らしむるあゞずや偖も吉川岩蔵ハ阪本高松両士に従ひ勝氏の目通りとして出仕なべ先生之と近く招き吉川岩蔵実名廣井盤之助と名乗身の薄命言ゞ訴の譯今門人より詳細さくり相違なきやと尋ねられ造漸ゆく頭を擡げ。コハ恐あるの仰りなる秘密に事を計ン

夫れ天ハ正道を加護ス故に至誠の人ハ艱難に陥入共自然と天道の恵憐と戴く。誠に正実の道ハ尽さゞんべからざる既に孝子岩造ハ人違ひにて虜捕とかり又ハ賊の為に衣金を奪えり。須ゝの浦辺に死すべくなりしも或ハ藝州にて島末氏の恵みあり道行人の仁あり。今ゝ不圖勝氏に拝謁仕る事皆天道の然らしむるにあらずや。偖も吉川岩蔵ハ阪本高松両士に従ひ勝氏の目通りとして出々ゝ先生之を近く招き吉川岩蔵実名廣井盤之助とか其身の薄命哀訴の譯今門人より詳細ゝくり相違なきやと尋ねられ造漸ゝく頭を擡げ。コハ恐入る仰かな秘密に事を計

へ大猫に云へ隠そのの増て此身に云よなると大望寛仁大度の
芳名と慕ひ何卒一臂の神力と賜ひ身の本懐と達つせん
と。斯く哀願とたし奉るに毛頭偽言申し上べるを假令張藤
の辨あるとも貴眼の通りの一嵐輩。ろんぞ博識智能なる。
先生と欺き奉り得人と奥底包まぬ岩造が言葉に誠
顕はるるとべ先生る左こそ有らんと笑ふと片頬に仰ある様
いうに吉川岩蔵とや。凡君父の讐を担ひ身に辛苦と積
累りの和漢倶に学を久だ。全く其方に限らんや。君父の
為に報難するハ臣子たる身の之常なり。何と苦行と仕る
にたらんや。西に駈り東へ奔るも夫ハ汝が自由なれと。
心底と沈静なしく寛然に時と待る暫時なりと我寓

ふ居つて事の虚実と伺ふと。我不肖なりと雖とも其孝
心と感ずる上ハ此藤太郎息あり内其方が為に盡力をして。
必らず本意とるべし其証として書と与へんと自手
硯引寄せて何角さらく書終り。岩蔵が掌に渡され
るとハ幾度ありし戴き。コハ其加なる御事哉小輩が
微孝と察し御一言と賜るさへ我身に取てハ千人力。其
上斯る玉葉迄下し賜る難有とさ。此高恩ハ身ハ死して。
九ツの世と経る迄いうぞう忘れと奉るべき定て父の霊
魂も冥き道なりお礼や述んと。掖を見る其文に曰
(一揃者門人吉川岩造実名廣井盤之助義父之仇有
之者三ノ右仇見當次第為相果候間万事御法之通

御作配可被下候以上。御軍艦奉行勝麟太郎判名國々役人中」と讀る終らず肘迫り感涙肝に銘じつゝ彼の張良が石公より受得し六韜三略より岩造が身ひを伏して言葉も出でざる頂くべうが恩謝の印し。あい幾層倍。身に餘りうれしさ。天へも昇る心地して有難涙い膝を傳ひ。畳も裏へ通るらん。斯る仁恵も後雙に勝色見する梅の花。色も香もある武士い誰も斯こそありたしと並居る諸士も先生の義を見て勇む日の本の魂ひとこそ感じる。夫より吉川岩造い勝氏の食客となり。專ら家事に勉強さし薪を刻み水を擔ひ。適日間を得る時ゐい諸士に親睦びて武技の論。聞得る毎に心に記おくし收しも忘んず色もなく。婢阿佞にいあらねども素より手健の気輔者。諸士の小用や間毎の掃除脱ぎ捨袴の小だゝまも。心を配る勉強ふ。衆人こぞつて賞しより。斯て吉川岩造い夜となく昼なく復讐の事遺忘ずゝ。斯く先生の恩恵に預り。安閑として日飯を貪り冥加なきのゝ成らんにあらう月日費ハやすき事。我身に於て本意なし。去ながら先生の此地に在も其中い我身他國をる事。何とあり心細うり。依つて想うに此浪花の地い万人の幅湊場処諸方の便宜とうけ玉るに至極自由自在にまて。居ながら他國を趨るに似より。尚又うる繁花

廣井盤助

盤助
無念寛と
廣井村の
陸奥の弘藏

なれば。此処に商法を開らき。其利を以て口糊を凌ぐべ
寛然に三郎の行方を尋ねんものと思へども。何を言う
にも漂浪人。是といふべき蓄蔵なく。何を資本金に其
意も果さん。然しながら此地に於ひても日に幾百の黄
金を扱ひ。馬や舩をもて商業仕る大賈もあるべ中ふべき。
番頭小僕も使役ぜして。其日暮しの小商あるべ是
に倣らひて。聊の着物なりとも賣代なし。夫を資本金
ふ商法すろう。當地の地理ハ委しうねど。人に備はる
奇走すろう。何をに赴くも方向を究めんと思へど。木ふ
落ちなる猿。孤島に漂えう捨小舩。他人の援助を得ん
事にハ我身の浮む瀬ハあじと。或日の日間に諸事に
向うひ。此事商業なしくるとべ。諸士も思ふに横手とうち。
足いあるべき良策なうう。然し人手に使たるハあまり
甲斐なきと業方なるとべ。自由自撰の商法を開くと。先今
日と渡ぐ五人失敬なる事なぐふ。多寡の知ところ小商
内。資本金とりふ〳〵數ハ知ところ。何品と賣ろうと。
生涯の活計にあるべ。翌日ある他人の有家と知り。首尾
よく本意と達せらるとなべ。忽ち昔しに帰り。吹き方矢
取る身の御事なるとべ。乃んの當産の口塞ぎよしとて
永業仕る身なる。其道に馴るとる中ハ。得手其資本金
と喰ひ込むとう。或る商人に聞し事あり。万事利発の
先生なるとべ。其抜目もなきと。何と言うても

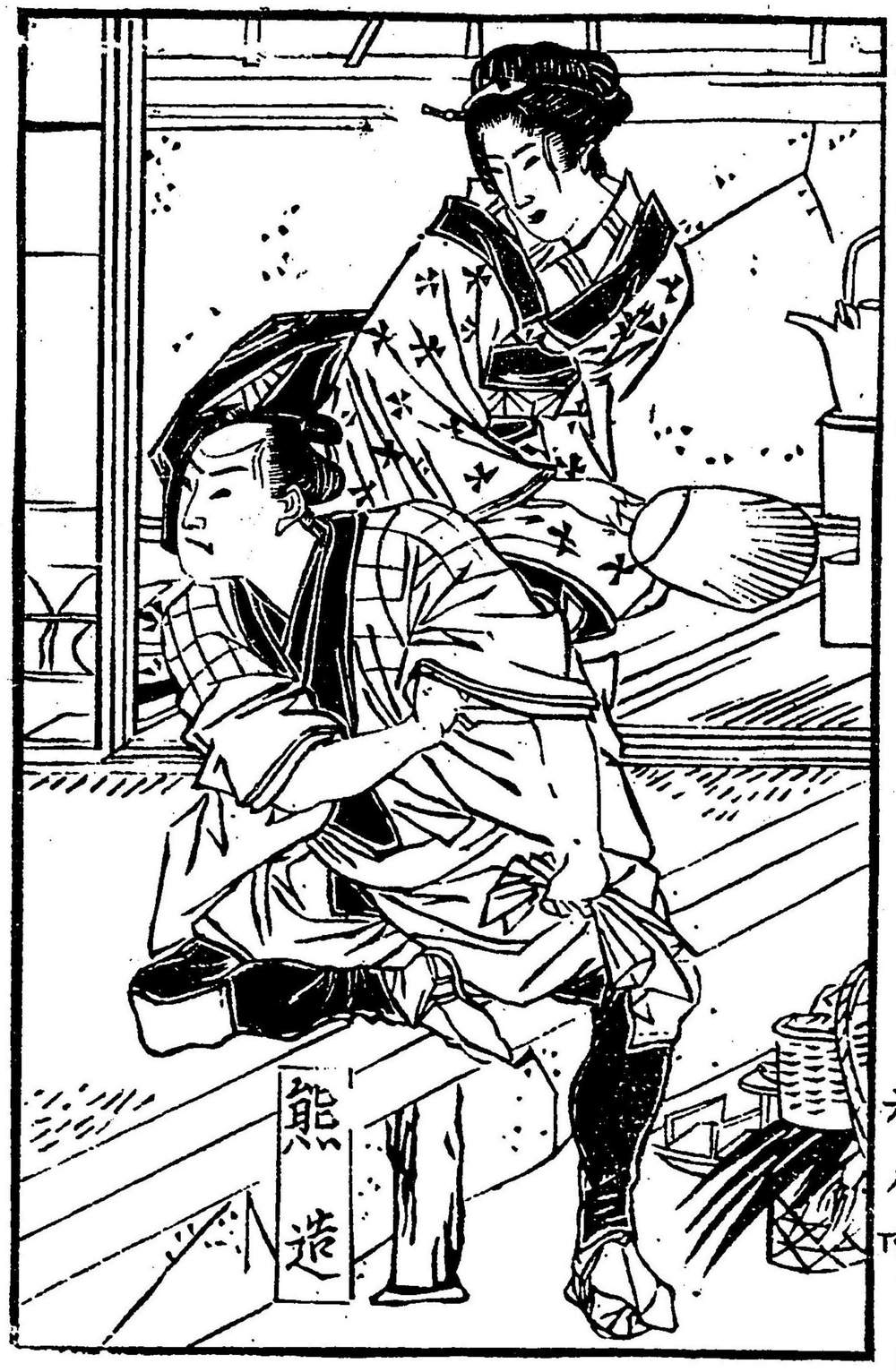
素人の事。其業を心得玉ひし。聊開業祝義の印として
呈し進らせんと。人々道を辨まへて最懇情の人々等皆
嚢中を捜りつゝ。身分相應に封金なし出若造り面前
に置き。是は些少の至りにて。何の端ふも足らねども先
高こなに代り千里の道も一歩とや。聊資金に足し
玉へと。口で掛けける水引ふも。赤き心と黄金色。肩に書
くへき厳秋奥斗も。彼の唐人の首陽に擅ふも換し
義かわ。で口糊の助成なしとゝ。岩藏は額に掌と
富て。はしなき事とお耳に觸と貴策賜る其上に
斯なる芳志と家るとは思ひ寄る此賜品辞退申も
は却つて失敬。假令何品商う共是失すまじ充分なるん。
暫くは恩借なし。身の活計の道を立て。時のいるを
相待へしと。幾度も押いなぎ。諸士に恩謝と述べる。
是より恩業変定なし。勝先生へも諸士よりしてその
義委細上伸なし。偖大阪も廣場なるとは何地へ居を
占むべきと其地の理と老ひるに。千方当つて長町と
いふあり。此地は小家の多くして。住む人迄も澤山成べ
小商内には屈竟の場処。幸ひ美に矮屋と借り受け。
偖何とぞ開業せんと彼是心とやらせと実不商業
は草の種。八百八色數々の中にも敵人に青蔬賣り。
是で望にまき前象と。身業に愧も荒稼ぎ。剰迄ぬ
搗捧も肩に居き孝と口糊と一荷に搗ひ。喰入る

肩の痛をとらへ涙と汗の流し賣り朝より市中と東西南北と歩行べ里該にあり通り出せん買うとの得意家も出来毎日前う代呂物に後ハ顔迄賣て来て岩造が来ぬ朝ハ買ひそくとして待老氣の述懐受る翌日もあり素ふり利発の上手者爰の合ひ口彼家の好物薄利で商う律義者懸直如才も内証ハ他人と爭ひ身にあまとび賣行く道も油断なく稼けハ思ふ利徳あり其上鰥男の事なまとび一日一口百日百杯高の知れたる入費にて今ハ收しの貯へも出来れと素ふり毎欲の生質是等の事にハ眼も止めず只管他人の在所とハ毎日探索仕うる

心ざに誠の道に可ひあべ祈ら迎る神や守るとうの菅公のうゝの如く孝子吉川岩造ハいろう先生の仁恵と得てあり其上諸士の怨情と受け夫と資本金に商業営なゝ其日間毎に怠慢なく他人の在家と探るとへどる素ふり他人三郎に一見せし事もなハ如何なる容貌年恰好我國にて人傳に聞得る侭に実地に知らべ尋ぬる内なる雲を暗何と當的る心元なく乃人の捆搦三郎とへる名のゝと力としてそうと為を事なれべ唯之物を求るに眼の先なる知れ難さに尚一層の憂苦と帯へべ殊更心いらぐちて天

に祈り神に歎きて。日を送る其中にも商業には改しの間も怠りなく。毎朝市中へ出稼の殊に廉うの商躰にて。自然と衆評よく。えう為には午前には何日も空然で。宅へ帰へるべ午食調のへ夫より勝手先生の宅に到りて暑寒を訪ひ。諸士の妾否に至る迄。暇ある日いえを尋ね。或ひは住吉天王寺。天満の天神座摩耶稲荷。道頓堀は芝居側と。人の集る地は尚更に。駈巡りて往来人の噂に耳を傾けて。他人の客子を伺ひ。素より柔和の生質。愛敬あつく人品あく。賤しからぬ風俗に日毎廻り得意場の。美の婦女彼処の水仕女。寡婦のとりくい。岩蔵より来り角に

或ひは眼引き袖曳きて。其殿ぶりの評義をなし芝居俳優にたぐへて。彼の誰某に能く似しなんど通常婦女子の癖として。ひんな男と添ひとげて。ふらふら扨て根葱なへ。婦人の中の果報者。私しや塔菜久波技草のふて三ッ葉と思へども。却つて愛相へく茶菓あがるとしと長芋も。其水芋になりうやせんと。まつと自然薯に出雲なる。縁と月日を松茸に祈る神とそ二股の心の竹の子打明て。先は何とも越瓜に自分惚の頼ひ事。凹低顔に白粉。南京瓦と冬瓜。合併なせし如くなるとど。夫とは若菜の思案なし。堪忍なるぬ干し菁茘更年寡婦の骸伸して。唇にさす紅生姜深る歯並


熊造

熊造
そろそろ
歌の有耳
とき

ハ初茄凡西瓜の種の行列う。黒々と塗る鬢面ハ白髪と
隠を額冨士岩造う来る度び毎にハ買う品うも心見
に。賣と見る氣の言葉ふハ。酒ゞお好うお菓子うと入ら
ざる心と量り牛蒡。息休りにハ茶も飲これと汲んぐも
出しさる面持にて盃うくばうりの愛敬に種々並べる
言葉の卿食應。是居膳の謹なるとハ心の動く処なるとと
名さへも硬さ吉川岩蔵兼て大望懐へし身の上たとへ
小町ゞ揚貴妃ゞ写賤津生ゞ舞解仕て。七日七夜さ口説く
共婦人如さふ心と奪ふる。多満男ふハ。うさとハ胡凡
て括る鼻うる素気なく。ポンと弾さ豆言葉に
鞘や情気なく。情気知らずに大根程。尚弥増る憂

しさに人や恋気なん取りたんと互に獨活蒙鷹の目も。
果ハ仕損の汐の目に玉の盃奪なし男とはぐゝ者こと
多うう。惜岩蔵ゞ寓居さう。此長町いる地ハ大阪
かして紀伊和泉へすゞ道の通ひちにて日本橋の渡り口
う。南北九町の長さにつゞる。依て其名に呼ぶとも
言ひ昔ハ名呉の松原迎詠歌人の種所ふにて寂莫た
る海邊なりしる年去り世ロ移りて今ハ繁花の地とる
もゞ流石往昔の名や殘りて名呉町ここそ呼ひなせし
と果ハ長町と唱へ換と去る里老ハ物語さう。此線街
子方うりして壱丁目うり三丁目迄。日本橋うり何丁
目と唱へ四丁目うり九丁目迄。こと長町と呼なしう。

大阪三郷の南組に属し。昊へ今宮村に接す。此六丁目か南に当りて軒を連られし旅宿屋めさご尋常の旅人へ泊らず。爰に寓宿客へ多く放蕩不頼にして。益猜疑産の者多くされば宿家の借座敷も。竹のすの子に筵の襖。一方出口の鳩部家同然土の鍋釜附貸にて。撮錢なる毎日捆賃一度遅納の輩へ如何成重病大患でも。決して酷酌仕る事なく。首節捆んで追ひ出さて其。薄情へ言語に絶たり。さるとが渡世の歩えに凡実を。今日の狼に腮と損し。下駄の歯入屋或ひいまゝ朝の烟も立て兼て。日々の食事も代價に詰り咽と通さぬ唎竿の仕換師。身の上考ずの賣ト者。空八百の辻軍談。

親のかほへも我面へも。泥と彩つゝ門俳優家業うゝ。てゆゝらと蛇遣ひや手品師惣嫁。手淫腰扱けにせ人不人と盲の銀欺し其外説経歌祭文義太夫チヨンカレ軒附歌乳児脊に笈唱や。出たゝめ永哥の西國順礼腑と巡らす俄師めとべえように身上を落し新何日うめくまを揚昆布賣。詰らん奴の鉢坊主廿四番へ中山寺かゐの緒建立お手傳ひとくえんを悲しさ大戸あげ。佛を磨汁の踊り婆。口に麻島の事觸とや。捧と飲えて食とをひ。限に鎌入る飯綱使ひ願人踊りや個陀羅經千差万別其中に。糸術剣法角力の切者身躰迄も投げ尽し浮世を何の一分とも居なゝ天下

大阪三郷の南組に属し。昊へ今宮村に接す。此六丁目か南に当りて軒を連らねし旅宿屋めさゞ尋常の旅人へ泊らず。爰に寓宿客へ多く放蕩不頼にして。益猶益産の者多くされば宿家の借座敷も竹のすの子に筵の襖一方出口の鳩部家同然土の鍋釜附賃にて。撮錢なる毎日捆賃一度遲納の輩へ如何成重病大患でも。改しも酷酌仕る事なく。首節捆んで追ひ出す其薄情へ言語に絶たり。さるとゞ渡世の歩こに凡実さ。今日の粮に腮を損し。下駄の歯入屋或ひはまゝ朝の烟も立て兼て。日々の食事も代價に詰り咽を通さぬ唎竿の仕換師。身の上ならずの賣ト者。空ハ百の辻軍談。

親のかはへも我面へも。泥と彩つゝる門俳優家業うそんてゆゝらと蛇遣ひや手品師惣嫁。手蔓腰抜けにせ人不人を盲の銀欺し其外説経歌祭文義太夫チヨンカレ軒附歌乳児脊に笈曽や。出たらめ永哥の西國順礼脚を巡らす俄師あるとゞえように身上を落し新何日うめくまを揚昆布賣詰らん奴の鉢坊主廿四番へ中山寺かゝの緒建立お手傳ひとくたんを悲しさ大戸あゞ。佛を磨汁の踊り婆。口に麻島の事觸とや。捧と飲ゝて食とをひ。限に鎌入る飯綱使ひ願人踊りや伺陀羅經千差万別其中に。糸術剱法角力の切者身躰迄も投げ尽し浮世を何の一分とも居なゝ天下

と三分仕る諸局狼り大先生憂の計策仕兼ねとご首に
代衣の欠け椀へ先祖重代の乞食の系圖焉に言葉を
遣すべき山崖に鐵を抽らに當物あり。其外窃盗
巾着切り。人の物あへ所存を掛け只島山の郭公。一声
限りの難勝負。奇よ遇うの塞薄貴めるる骨牌の面
うり。誰と制札の裡と潜る其悪黨を算る時へ千
と以て拘と加へ此所に寄集り夜とちく昼とちく大繁
昌三日此他境に遊ぐる時へ生涯其楽しきと忘うべうば
とうや（編者侘て日前文に説咲談へ維新以前徳川家
執政の時にして。方今へ聖代の恩澤に溢れと。其醜界も
洗濯なし。忽返掌の清淨域と変ず。看客今昔と混雑

仕る勿れと偖吉川岩造に此長町にすむ
生質閑る鉄石心変して方圓に隨ず。朱みる染らぬ
壮雄の只仇人三郎の噂のく衆に雑りて探るのく。去
る共素ふり無欲心日々の射利の余財ありとば自然に
落来る流民や。不具なる者や盲目抔にえと吞まば
恵と手へ寒餓を救助遣しるとば流石不頼の悪黨も
人の性へ善とうや。其実情と感じる余り。或日閑かの
談話つのでに岩公前体貴様の気質。此儲るぬ金銭
と余る物と一日る。商賣休む事るあく酒とる飲まに
色ある捨ず。皆夫々へ配分ある。其心根の不審しさよ
前へ如何なる身の上で。如何なる訳にて零落せしと。眉

をひそめて問ふ者あり。岩造彼者に答る樣我の産ハ四國
辺隨分招應の農家なるゞ色と酒とに身上を崩し果て
親にも勘当受け。今思ひ知る身の不孝。其罪正に酒色
と斷ち。稼ぐ余りい人に子へて。聊前非を悔るのみと聞て
彼者ハタと膝打ち。ア、感心に見上る人哉斯迄改心仕る
上ハ頭ハ首尾能く帰國なし。親公の名蹟相續ハ疑ひ
なしと賞そなし。是ハ雲泥の談しなるゞ。序なゞらに聞
候らへ。是も産地ハ四國の土佐ゆゑ本名ハ知らざれども原ハ
何でも二本指し先年酒に醉ひろ伏國元にて人を害
しと聞く岩造ハ心耳を澄し思ひ切て膝を進めなゞら。
其奥遥しと伺ひ寄る。此後如何成物語ら。夫ハ次の巻にゝ

土佐の聞書巻ノ六

古語に云ずや天に口なし人を以て言ましむと。斯て孝
子岩造ハ思ひざる茶飲噺しに耳寄なりけるとゝ。
膝を進め聞入るゝ。以前の男も煙管をたゝき。偖今
申す悪者ハ國を放拂ひ諸國を巡り。江戸に到りて
相撲取の數ゆへ入るゝ放蕩故ら。其江戸なる所ハ居らず。
此長町へ吟迷ひ来て。卒何やらの話し序で。自分の口
ら高慢噺し。果ハ爰にも居らるゝずなりて。界の串
の並松に居ると聞しゞ今ハ又紀州の岐田のお砲臺
なて。小使役を仕て居るとゝ。反ろに聞しゞ此双寺ハ生涯
何処にも長居ハ出来ぞ。仕舞ハ公儀の御厄介とゝ

岩造は朋に早鐘尚るとしらぬ顔附してコハけしからぬ悪者
なるまて其男は何歳位なるぞ。名は何と申せと根問ひに彼
はかんにをふる。年齢容貌云々にて名は松兵衛と唱へしが。
ケ様に悪事を爲す双は名前もどふで一ツなるべ。亮なる
ね事なが。聞る侭の話しなりと聞取此方は気も滅らぬ。
國元迄聞傳へる。容貌もあひ指折まべ。年齢迄も符
合すれば。夫うあれは知られぬ共。紀州とあまべ程近し彼地に
至り事の実不実紀さん物迄の噂は耳あも留めず我家に
帰り準備をなし。勝氏方一散走り。到りて見まべ生憎に。
先生は公用迎上京中の留守なれば一書を遺し留守居の
諸士に委細語り。衣服更め両刀を腰に流石は武士の
猛さ紀の路へ走り行く。其夜勝先生には公用果て下改め
まべ留守居の諸士岩造へ遺書を呈し尚云々と委細口
上あり々まべ先生勝と夕と打ちつく孝子の時を得しと
満面笑を含まれまべ其余の銘々口を揃へ吉川氏へ援
双なさんと願へばそを免さまして中に田中昌蔵は紀州藩
の事なまべ先生は田中氏に一策授けて其場より急駕
釣らせて衆に魁立若山にして駆り行く。夫は偖置岩造は
敵田に至りて容子を捜まは早其者は疑惑家り。地頭え
捕縛成らしと聞くう岩造歯ぎしをなし。天運尽き
なる我武尋りう敵は本国にて地頭の手に觸まと今又爰
に捕縛とられば弥我手に討つ事難し斯迄成り行く

武運の末是非及ばず切腹と。刀の柄迄手へ掛られと。イヤ我が
ゝ左にあらず。弥三郎と見認ずして爰に死するハ愚の至。先
聽へ逐一訴へ事の虚実を正しく上。弥佐家に変りて我手
ゟ討て其時に切腹為す共遅ゝと地頭へさして急
ぎ来る。道にて田中の尾ゝ乗し四士にハタと行合て変し
く語るハ衆人ハ早オノ〳〵玉ゝ吉川氏先生の配策あるべ
弥佐人に変まゝ貴所の手として討得る事。假令虚と
なる迚も夫ハ心に掛られあと。種々に省めつゝ城下に宿り
と取ゝるべ。勝吉川の義孝を慕ひ爰に渡る衆士に八。
水戸在内若山高知。阪本龍馬。高松太郎。田中昌造佐藤
某氏千屋大和。横幕。新宮秋月。高田。伊藤に九十九

或ひハ石井。加藤の面々。義を見て勇む壮男の盃を上げ
釵を揮ひ。魚類の頭を切落し。是見玉へ斯の如く。首尾よ
く本意遂玉ひ。鱠と看に岩造公佐人の肉と斯の如く。
醢肉にし食ん抔。勇む詞ハ武士の実に頼もゝ酒禁也。
然る所に蚊田に於て。捕縛に成りし者とそへ実名捕稿
三郎ゟ。然る明日國界。山中に於て追放の由正しく報
知ありゝ。吉川岩造小躍なし夜とこめて支度整
のへ諸士と連立山中といふ地に至り三郎遅しと待居る
内。衆士に向ひて如何方々。倶に天を戴ざるの仇
人と討果すハ子たる我身にある事なれバ。先生方の恩
恵にハ早法未練の三郎なれバ道を求めて迎行き

孝子盤之助
千辛万苦して
終ふ父の仇を
討本意を遂る

あべそさんとう且つ又見物人に過ちの無き様保護
玉えうべしと是に依て諸士の名々其準備をぞなし
ける。干時元治元年甲子年六月二日申の上刻南の方
より一個の刑人獄卒四五人是を捕縛し國界のほとりに来り。之
を放てば數万の見物思ひの外大声嗚呼ろく。彼の者男を見
廻して我追放と斯く迄に武家迄交りし數多の見物不審
さよと足早に往くと仕ると吉川岩造袖を控へて声をかけ。
其方は土佐の慶治成ると問へば彼者返り見てイヤ左に不有
我とそは捌橋三郎とは者なりと兼て包し本名を不思我より
口走まは左こそ有らんと前に廻りヤア珍らしや三郎とう。我と
誰とう思うらん。先年土佐の浦戸に於て其方が為に殺さ
れたる。廣井大六郎一子盤之助化名吉川岩造是なり。其方を
討んと辛苦艱難此時待つ事年久しイザ尋常に勝負せ
よ然し其方は刀劍有るまじ是与えんと兼てより用意の一刀
投げ出だし思ひ掛けぬ事なれど身に覚へある事なれば今更
陳ずる言葉も無く其一刀を腰に佩き男を見れば稲麻
竹圍數万の見物群をなし錐を立へき寸地もなく人のて城
と繁し如く迎る道を取れば我身の運命冥途の土産に死物
狂ひ眼に物見せて呉んずと怒気顕はして進み入る此方は今月
と嘗業の親の仇人を討つ時成れば荒然として進を寄り
イザ〳〵の互ひの掛声忽然相方抜き拂し一上一下虚々

實々一進一退秘術を尽す。折柄一天掻き曇暴雨八盆を傾く如く。剣之大風発り樹木を倒し霧を捲き。尺地も見えず其中も。厭と云ふ去らず切結び。散す火花八黒雲に電光仕る如くして。龍吟じて雨と発し。虎嘯むべ風を呼ぶと八斯く為す業をや言うなん互ひに今八一生懸命。雨を飲ませて八咽を潤し。風を吸て八呼吸を補ひ殊更孝子岩造八頂羽超雲げ勇を震ひ。横撃横戦透間もなく。腕と限りに附入らう。天何ぞ逆を助け。神何ぞ順をおくんや。大喝一声吉川ゲ。お込む太刀凡三郎ゲ。右の腕を破羅離ずんど返すと刀に面部を切らると一声喚びて三郎八忽然大地へ倒るを。飛うて胸元を刺せ。並ミ居る諸士も見物もいうや出来ざと賞賛す。声八山河に裏ろさる。孝士首尾能く仇を討ば其死骸八里更に諸し。堺奉行島居越前守の手を経て。大阪城代松平伊豆守より。事実詳細幕府へ上申し岩造八土州へ送り。此地に於て禁足なす然るに不日赦免に相成り。剣さへ國君に賞八を蒙むり。舊の徒士役を更さる。御側役に任ぜらるる。名も原の廣井盤之助と改めて。益々忠勤励まるゲ。慶應元年長藩の事件に因て。幕府も上阪あらるべ。土州亥も未阪ある。此時倶に上阪なし。勝先生にも舊恩を厚く謝し。土州紀州の間に生ぜし事件に附ても紀州に使

ひし。君命を亜ぐ。事なく和議を調のひ八全く盤之助
う熟切なれば弥其名四方に顕はし賞ざる人とそなりけ
る。惜むらくハ其同年九月六日。病気の為行年廿七
歳を以て終に死籍に入れり。國君殊更悲惜の余
り。親族吉田庫之助を以て。其八家蹟を嗣しめ玉う。嗚呼
其躬八土塊に帰ると雖ども。其名八末世の亀鑑に残
る。至孝の徳の廣大なるべずや。此外廣八井盤之助の賞
談美譚八大阪日報。十年八月廿三日より。同九月一日迄に
詳細あると此草紙の。指限に迫り。其概略を述るなれば
看客其漏落を不責。幸ひに宥恕と希うと云
て子復讐近頃土佐の聞書大尾

明治十年十月十六日印刷出板

大阪府平民
大阪府第二大区三小区
大和町第十番地
出版人 長尾吉之助

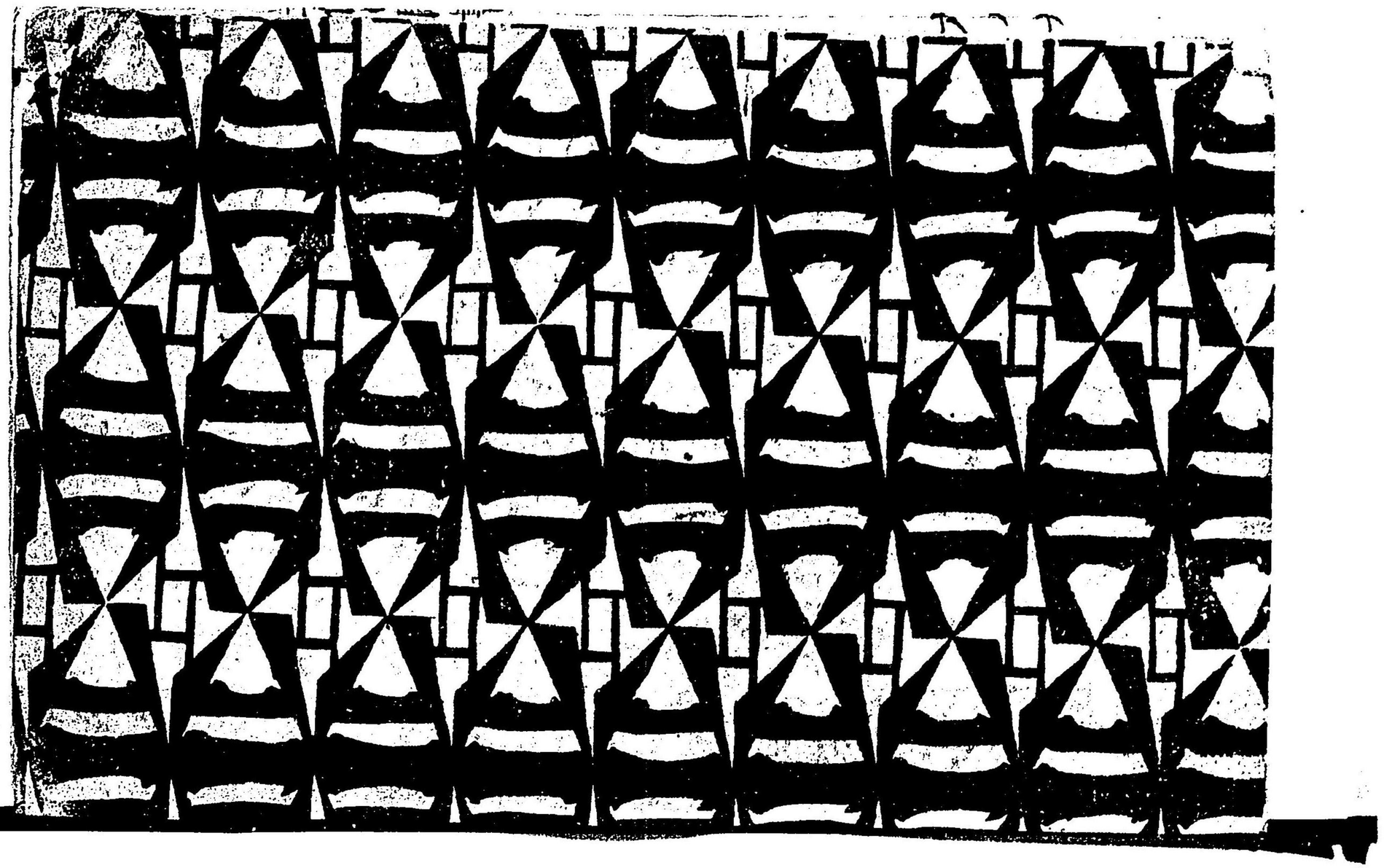
大阪府平民
大阪府第二大区九小区
平野町八丁目九番地
著述人 石川和助

定価五厘

ひし君命を亟じ。事なく和議を調のひしへ全く盤之助
う熟切なれば弥其名四方に顕し賞ざる人こそなりけ
るら。惜むらくは其同年九月六日。病気の為行年廿七
歳を以て終に死籍に入り。國君殊更悲惜の余
り。親族吉田麻之助を以て。其人家蹟を嗣しめ玉う。嗚呼
其躬は土塊に帰ると雖ども。其名は末世の亀鑑に残
る。至孝の徳の廣大なるや。此外廣井盤之助の賞
談美譚は大阪日報。十年八月廿二日。同九月一日迄に
詳細あると此草紙の紙限に迫り。其概略を述るなれば
看客其漏落を不責。幸ひに免しと希うと云
て子復讐近頃土佐の聞書大尾

明治十年十月十六日印刷出板

大阪府平民
大阪府第二大区三小区
大和河内十番地
仮寄人　長尾春之助

大阪府平民
大阪府第一大区九小区
平野町五丁目廿八番地
著板主　石川和助

七銭五厘